
冬の向日葵

桜桃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

冬の向日葵

【ZINE】

Z0689Y

【作者名】

桜桃

【あらすじ】

「わかつてほしいのは貴方だけ。
隣に居てほしいのも貴方だけ。」
願い事は1つ。
彼の隣に居たい。

「なあ、灰原。」

「何よ。」

「え、いや……起きるのか？」

朝、学校に来たコナンは隣の窓に話しかける。

「別に。どうして？」

「いや、今ひどい顔見えてるからよ……」

「もともとこの顔なのよ。」

「眠くなったなら……」あんなことを?

「ぐつと荒こ口調で囁つた。

「べ、別にやうござんじや……」

もつと怒りせたかと焦るコナン。

「私なんかにかまつてないで、彼女を元気付ける方法」を考えれば？

最近また、泣かせてるやつじゃない？」

「や、そりだな・・・」

「電話をしてみるとか、いろいろあるでしょ。」

乱暴に教科書を置いていく。

「哀ちゃん、どうしたの？」

「あ・・・別に、なんでもないわよ。」

「すっげー変わつよ。・・・」

「何か言つたかしら？」

「何も言つてしません。」

「そりゃ。」

「コナン君と哀ちゃん、何はなしてたの？」

「他愛のない話ですよ。」

「ふうん。」

歩美は人差し指を頬にあてて、?マークを浮かべた。

やあつと書ける日がきました！

mineさんのからのリクエスト小説です。

蘭と哀の恋のバトル！！

どうなるのじゃつか？

これからも宜しくお願ひします

「　「　「お・ん・せん!お・ん・せん!」」

歩美、元太、光彦の3人は嬉しそうにはしゃいでいた。

ここは阿笠邸の前。

「それにしても・・・博士と灰原さん、遅いですね・・・。」

「ちょっと待つててって、15分前に言つたきつだよね。」

「腹でも壊してんじゃねーの?」

「・・・元太君じゃないんですから・・・。」

「ま、取り合えず寒いから博士ん家で待つてよーぜ。」

「賛成!ー!」

「はーかせーまだあ?」

「まちくだびれてしまつましたよ。」

「俺なんか腹減つちまつたぜー」

「なこにせんじやんだよ。」

「すまんすまん。昨日のつけに準備してなくてな・・・」

「だから言つたじやない。
もう準備したの?つて。つたく・・・。」

「ははは・・・。」

もつ吐笑こするしかない。

「仕方ねえ……俺達も手伝うぜ。」

「そうですねー！」

一瞬でやつたらすぐ終わるもん！」

卷之三

「おー！」

何に対してもハイテンションな3人に

小さく笑う。

「そういえば・・・彼女に電話してあげたの？」

え？ あ、ああ・・・まあな。

ズキンツ

「あ、う・・・・・」

「・・・・? 何か、怒つてねえか?」

「氣のせこよ。」

「?」

「せひ、せひあとこれ運んでくれる? じやなこと口が暮れるわよ。」

やつまに放つと娘はスタスターと柴を出した。

「・・・なんだあ?」

コナンの頭の中は?マークでいっぱいだった。

哀は静かに窓の外を眺めた。

「さあね。」

「はあ？ それって、俺の「とかよ。」

「……どっかの誰かさんも、あんまりのうけないでよね。」

「わ、わかってる。・。・。・。」

「食べ過ぎるなよ、元太。」

「たっくさんのお土産買つてかなきやなー。」

「楽しみですー。」

「せりと出発だねー。」

文化の日・・・は

部活の打ち上げ会です

部活が終わってそのままドンキへ直行なのですが・・・。

声がない・・・！

明日は部活、見学だわ・・・。

「やあっといけるね 温泉。」

「ほんとですね。」

「つたく博士、準備にどんだけかかってんだよ。」

「まあ、今度からは灰原の言つとおり
前の日から準備しとくんだな、博士。」

少年探偵団の言葉に博士は苦笑い。

「ふああ・・ほんとならもつと寝ときたいのに
博士にたたき起しにされた私の身にもなつてほしいものね。」

「すまんのあ、哀君。」

「私、寝てるから着いたら起しして。」

助手席に座る哀が冷たく言い放つ。

「おい、博士。

灰原、いつもに増して機嫌悪くねえか？」

「わしが起こしてしまったからだるひつへ」

「いや、最近ずっとなんだよなー・・・」

「ちよつと、聞こえてるわよ。」

「え、。」

哀はジロリとコナンを睨んだ。

「私の機嫌が悪かろ? とそうでなかろ? と貴方には関係のないこと? でしょ?」

「あ、ああ・・・そうだな。」

ナンと博士は田を点にするしかなかつた。

キキツ

「わあ・・・温泉、だね！」

「ええ・・・温泉、ですね！」

「お・・・・温泉、だな！」

瞳を輝かせる。

「おい、灰原。着いたぞ。」

「ん・・そう。」

力チャツ

「綺麗な旅館ですね。」

「温泉にはいるの、楽しみ〜〜！」

「俺たちの部屋、どうだよーーー。」

「これこれ・・・」

「おい、走るなって。・・・女王様が怒るわ。」

後ろで腕を組み、睨む哀の姿を見て口ナシはつぶやいた。

「女王様って、私のことかしら。」

「他に誰がいるっていうんだよ。」

「じゃあ・・・女王様の荷物、持つてくれない?」

「俺が?」

「他に誰がいるっていうのよ。」

哀はコナンに荷物を差し出す。

「はあ・・・」

「落とさないでよね。」

「女王様の大切な荷物なんだから。」

「へいへい。」

「あれー」ナンくん、何で喪ちやんの荷物持つてるの?」

「お願いだからここに触れないでくれ。」

「?」

あつちーじゅぢに転々として元太と光彦は叫んだ。

「 いじゅうがお部屋で、いじやこます。」

「 いじのお部屋、ヒトイリギツヒミツヒんだ。」

「 あやに今の時期にぴったりね。」

「 いじのお部屋は柊の花がよく見えるんですよ。
今は冬ですから。」

ヒジリと笑つて説明してくれた。

「 いじゅちは紅葉だつてよー。」

「 いじゅちは桜ですー。」

「そこのお部屋は秋になると紅葉が綺麗に見えるんです。
そして、そこのお部屋は春になると桜が満開に咲くんですよ。」

「へえ・・・それ見える花の名前を部屋に割り振つてるわけね。」

「

「なんだか口マソティック。」

「・・・重い。」

「あなたね、感動しているそばからそんなこと言わないでくれる?
崩れるわ。」

「あんなあ、おもてーんだよこれー。」

「あら、私女王様なんですよ?」

「女王様にそんな重たいものを持たせる気?」

「・・・お前、女王様って言つたの、気にしているのか?」

「別に。」

「ナンは田が点になり、哀は睨んでいる。」

「 あれ、どうも。」

中へと入っていった。

遅くなつてすみません！！

次回もまた、宜しくお願いします！！

「わあ、ひろーい！！」

「部屋がたくさんあります！」

「お、いらっしゃいよー！ 風呂場も広いぜ！」

「わあ、早くお風呂入れような！入りたい！」

あ、そっか！」

——大浴場！」

3人はおおはしゃぎ。

「どうするへ博士。

先に風呂に入るか?」

「わしはどちらでもかまわんが・・・

「ねえ、先に入っちゃおうよ!」

「そうですね。」

「俺もう入る気満々だぜ!」

「んじゃあ、今から一時間後でここに来て夕飯にしてやるぜ。」

「行く、袁ちゃん。」

「悪いけど、私はバス。」

「おーおー・・・お前口元きしまで雰囲気ぶつ壊すなよな。」

「うるさいわね、疲れてるのよ。」

「お風呂なら私が好きなときに入るから。」

「吉田さん、ごめんなさいね。」

「あ・・・ううん。気にしないで。」

「じゃ、元太君、光彦君、行こう?」

「おおー!」

「はい。」

3人で仲良く歩くところを見送る。

「・・・灰原、オメー何怒つてんだよ。」

「別に。」

「うそつけ。顔が怒ってるのバレバレ。」

「私はもともとこういう顔なのよ。」

「大体、風呂くらい一緒に入ってやれよな・・・歩美ちゃん、完全に作り笑いしてたぞ。お前にだつてわかつてたんだろ?」

「・・・」

「何で怒つてんのかしらねえけど
夕飯はちゃんとカルシウムとつておけよ?」

コナンは少しあつていー残すと部屋をあとこした。

「はあ・・・ったく、本当に女心をわかつてないのね。
あれでちゃんと探偵が務まってるのが怖いわ。」

哀は桜の花を見つめながら少しあつぶやいた。

次回もよろしくです！！

「はー、気持ちよかつた
あれー、哀ちゃん何読んでるの?」

「え? ああ・・・科学者の苦悶。つてこいつ
ゾクゾクしちゃうよな話よ。」

「へえ。

「終わったら歩美にも見せて!」

「いいけど・・・死体とか殺しとか・・・
あるし、漢字も沢山あるから読めないわよ?」

「やうなんだ・・・歩美には無理そうだね。」

やう言つて笑顔を向ける。

「吉田さん、一緒に入んなくて・・・怒つてる?」

「え? なんでー? そりや、ちょっと悲しかつたけど・・・でも、哀ちゃんが入りたくないって言つてるんだもん無理には誘えないでしょ?」

「吉田さん・・・」

「あ、ねえー哀ちゃん、柊の花が月の光で輝いてるー。宝石みたいー。綺麗だね!」

「ええ・・・」

「へえ、じー、柊だけじゃなく月も綺麗に見えるんだな。」

「わつコナン君ー。ビックリした・・・」

「貴方ね・・・人間なら人間らしく物音くらに立てなさーよ。ビックリするじゃない・・・」

「わりーわりー。」

悪そうに詭びないコナンに哀はため息を漏らした。

「そろそろ夕飯の準備しに来るんじゃない？」

「え？ ここってバイキングとかじゃないの？」

「ああ・・・ここは旅館だからここの人気が持ってきてくれんだよ。指定の時間にな。」

「へえ。」

「はいはい・・・探偵さんは何でも知つていいわね？」

「あのなあ・・・嫌味にしか聞こえねえんだけど。」

「別に。」

「まあ・・・ちなみにこの引き戸をひいてみると・・・」

「わあ・・・！」

「綺麗な天女の絵が飾られてるんだぜ。」

「それさ、ジグソーパズルで、こここの女将さんの趣味らしいんだ。あまりにも作りすぎたらしくて一部屋一部屋に飾つてるんだぜ。確か・・・サクラの部屋は女神。スミレの部屋は天使。ヒマワリの部屋はつるぎ。コスモスの部屋は妖精。つと・・・こんな具合に。」

「・・・かなり詳しいのね。」

「ああ・・・前にここで殺人事件があつて・・・」

「殺人事件つて・・・」

「大丈夫、現場はもう使われてないからよ!」

「そういう意味じゃないわよ・・・つたく。」

「それより、小嶋君たちは?」

「ああ・・・まだ入つてるぜ。
遅いから先にあがつてきたんだ。」

「ふーん。」

ダダダダダダダツ

バンツ

「元太、少し静かに・・つて光彦かよ。」

「た、大変です！」

光彦の後ろから元太が息を切らしてやつてくる。

「た、大変だ！」

「どうしたの？」

「殺人事件か！？」

「・・・なんで嬉しそうなのよ。

人が殺されることがそんなに嬉しいの？」

「そうじゃなくて・・・

最近事件がご無沙汰だったから・・・
謎解きしてーな、って思つてて・・・

「だつたら、なぞなぞでも解いてなさいよ。」

「あれは簡単やんなんだよー。」

「だつたら難しきのやればこ二ドショヘ。」

「ヤーじゃなくてー。」

「ビハでもここんでやん、そんなのーー。」

「とつあえず・・・僕にこいついへば」セーー。」

「「？」

とつあえず、光彦につこつこへー」となつた。

さて・・・

殺人事件、なのでしょうか?

それとも・・・。

「おい、光彦。

一体何があつたんだよ。」

「あの人、見てください！！」

指をさす方向を見る。

腰まであるだらつ長い黒髪はゆるくカールされている。

真っ白な肌にうつすらと頬はピンク。

薄い唇。

世間では一般的に「美人」の分類に入る

1人の女が周りにちやほやされながら笑っている。

「あの人はどうかしたか？」

「なんか、女将さんとか手懐けてるけど……
どつかの令嬢なのがしら？」

「いえ、違いますよー！」

「じゃあ、誰なの？あの人。」

「新一さんの恋人らしいんですよ！」

「「はあーーっ。」

コナンと哀は同時に声を出す。

「ちょっと、工藤君。

貴方いつの間にあんな人に出会ったのよ。」

「しらねえよ。

第一、名前も知らないんだからよー。」

「だったら何で名乗ってるのよ。彼女だつて。」

「だーかーら、しらねえよー。」

大体、新一なんて珍しい名前じゃねえだろ。」

「あのー、『ナン君、灰原さん……
僕の話し、聞いてますか?』

「あ、わり……」

「で……彼女は高校生探偵の『藤新一の彼女だつて
言つてるの?』

「はい。何でも新一さんが『』で起きた殺人事件を解決したらしく
て……

「この旅館の人結構新一さんに恩を感じてるそなんですよ。』

「だから、彼の恋人だというだけであんなにちやほやとされてるの
ね。』

「はい。』

「でもさー、新一お兄さんの恋人つて蘭お姉さんでしょ?』

「二股なんじやねえか?』

「ひどいですね、それは。』

「男の風上にもおけません!女性の敵です!……』

「おいおい……』

「まあまあ……私の見たところ。
彼女は偽者ね。』

「彼女は偽者ね。』

「え？ 偽者？」

田を丸くする歩美。

「ええ。

でしょ？『江戸川君』？」

「・・・。ああ、新一兄ちゃんは『股するよ』ひな男じやないよ。
それに・・・」

「それに？」

「う、蘭姉ちゃんの」と以外はが、眼中にないと・・・
思ひ・・・」

ズキンッ

真っ赤になりながら答えたコナンの姿と

言葉に赤はとまどいを隠せないでいた。

「そつかー、そだよねえ。」

「じゃあ、何の人・・・そんなうそついてるんでしょう・・・」

「金でも貰うつていう魂胆じゃねえか?」

「そりでしょつか・・・」

「ま、嘘なんてすぐバレるものよ。」

「本人がそれで気がすむのならいいじゃない。」

「ほつときなさいよ。」

「だけど・・・」

「ま、ここは灰原の言つとおりほつとけ。」

「そのうち本人も飽きるだろ。」

納得できない様子の3人を置いて再び歩き出す2人。

「そりいえば、博士びついた?」

「ああ、博士ならまだ入つてますよ。」

「はあ？ いい加減のぼせるぞ？」

「つていうか、夕飯に間に合わないわよ。」

「だ、だよな・・・」

「僕、呼んで来ます。先に戻つてください。」

「あー、じゃあ、よろしくな、光彦。」

「はい。」

まさかの偽者？

いやあ、これ・・・
ある少女漫画にあつたんですね。
偽者を偽つた美しい女性が居て・・・
でも本物はただの子供みたいな対して美しくもない女の子。
その子は自分が本物だって言つんですけど信じてもらえないんですね。

そこで考えたのが・・・

『新一の彼女だって嘘つくなつがいたら・・・？』

でした。

これにどう対処するのかも自分としては楽しみで
書きたかったんですね。
3年越しの夢でした・・・。

「ふあああ、良くなあ。

おはよ、「ナンくん。」

「おはよ・・・・

あ、灰原どこ行つてたんだよ。

こんな早くに・・・まだ7時前だぞ?」

「別に・・・

ただ頭を冷やしてただけ。」

「ふーん・・・・

「それより、ほんとこいつの?」

「え?」

「昨日の、H藤君の彼女氣取りの?」

「ああ・・・いいたい奴には言わせとけばいいって
昨日も言つただろ?」

「どうやら、そういう状態じゃなれりつ。」

「はあ？」

喪の言葉にコナンは苦笑つて聞く。

「結構調子に乗つてゐみたい。」

「いいんじゃねーの？』

それで気分が良くなるんだつたひ。

「・・・お金、取つてゐるのよ。」

「は？」

「ここで事件を解決して、

あなた、少しでも報酬を貰つた？』

「いや・・・まだ高校生だし・・・
いくら事件を解決したとしても、貰つてねえよ。
全部断つた。』

「でしょ？ね・・・

だから、その彼女が・・・そのときの報酬を貰つてゐるのよ。』

「貰つてゐ?」

「ええ。

もう女王様氣取りつたらなんの・・・廊下ですれ違つたときなんか、頭を下げなかつたって突き飛ばされたのよ。

つたく・・・何様つて感じよね。」

「突き飛ばすつて・・・」

「一步間違えたら暴行罪よ、あの人。」

静かに怒りをぶつけていく。

「で? いいの?

あのままだと貴方の評判・・・

ガタ落ちよ。

さつきだつて従業員の人が喰いてたわよ。
あんな女を彼女にしてる工藤新一の
気心が知れない・・・つてね。」

「はは・・・」

「笑つてる場合じゃないわよ。
大体、彼女だと偽つてお金を貰うなんて・・・
貴方の一番大嫌いな・・・犯罪なんじやないの?」

意味ありげな表情で哀はコナンを見た。

「行くか・・・・・」

「どこに行くの?」

「え?いや・・・・・」

「昨日の、上藤君の彼女だと偽つてた人に
一言・・・・・言つてくるのよ。」

「そうなんですか!?」

「俺たちもいくぜ!-!」

「おいおい・・・・・灰原、おめーが余計なこと言つから・・・・・

「あら、1人より大勢のほうが心強いでしょ?」

「・・・・・はあ。」

「ちゅうと、この「シナ」割れてたんだけど。」

「す、すみません！」

「つたぐ、謝罪だけじゃたりないわよ。
そうねえ・・・一万、で許してあげる。」

「そんな・・・お金とるんですか?

「おお、正瀧れでしゅうします」

「うれしのよークソババアー！」

あんたは言うこと聞いてればいいのよ。
あたしは工藤新一の彼女よ！？

そんなあたしに逆らつていいこと黙つてんのー? 恩を仇で返さないでよー! 「

「す、すみません・・・」

「ずいぶん言いたい放題ね。
しかも、かなり荒い性格・・・」

「あの人、報酬貰つてたんだ・・・」

「コップが割れてるだけで一万だつてよー! 高け~よなあ。」

「それに、宿泊代をタダで要求してるみたいですし・・・
許せませんね。」

「おねーさん。」

「なに?」

話しかけてきた歩美にすこい形相で睨みつける。

「なんか用?

工藤くんなら居ないわよ。

彼は今、事件でいないの。」

「あひ、ちやんと調べてるみたいね。」

「おこおこ・・・」

「それで?何の用なのよ。」

「ちょっと聞きたい」とがあつただけなのよ。
貴方と工藤新一の出会い・・・とか。

あの有名な高校生探偵との出会いを聞きたくて。」

「あら・・・

なんだそんなこと。

別にいいわよ。そななことなら。」

以外にあつせりと承諾してきた。

そして、すぐ近くの休憩所に腰を下ろす。

「体のライン・・・蘭さんといい戦いね。」

「ど！」見てんだよ、おめーは・・・」

「それで・・・ど！から話しましょうか？」

「やうね。彼とど！で出合つたからでお願いするわ。」

哀は楽しそうに微笑みかけた。

偽彼女 · ·

果たして彼女は何者!?

「そうね・・・彼とは高校が同じなのよ。」

「へえ・・・」

「最初は私の片思い。
でも、図書室で何回か会つようになつてね・・・
ある日、突然キスされたの。
それからよ、私たちの付き合いは・・・」

「付き合つて何年目なのかしら?」

「高一のときからだから・・・1年くらいかしら。」

「つて言つてるけど・・・知り合いで?」

「じりねえよ。」

「多分、学校 자체違うと思ひ。」

「ふうん・・・」

「貴方の名前は？」

「新垣亞理紗よ。
にいがきあつさ

「亞理紗・・・
ねえ、知ってる？」

「だから、しらねえって言ひしるだろ？」

「やう。」

「で？後は何を聞きたいの？」

「彼の両親とは仲がいいの？」

「両親？ええ。仲いいわよ。

「彼より私を気に入ってくれるくらいにね。」

「ずいぶん、下調べされてるみたいね。
彼より気に入られてるですか？」

「はは・・・」

「彼は今もサッカーを続けるのかしら？」

「ええ。部活と勉強と探偵・・・」

両立が大変だつていつつも言つてたわよ。」

得意げに話す亜理紗に哀はクスッと笑みを浮かべる。

「何がおかしいの？」

「別に・・・
ただ、そこまで嘘を突き通せるなんて・・・
すごいと関心してただけよ。」

「嘘つてね・・・」

亜理紗がグッと拳に力を入れたとき

「あれ?」

突然声が聞こえてきた。

「事件?」

「事件ないねえもんだったよー。すで」

「蘭お姉さんー。」

(悪かったな・・・)

「だつて、この子がこるといつも事件に遭遇するんだもんー。」

「ちよつと、園子・・・

そんな言い方はないでしょ?」

「う、蘭お姉さんー。」

「・・・あ、眼鏡のガキンチヨーなんで困るのよー。」

「ああー！とんでもない大事件だーー！」

「何があつたの？」

「あの人、新一お兄さんの彼女さんだつて言つてるのー。」

蘭と園子の田線は歩美の指差す方向へと変わる。

「誰？あの人・・・」

「新垣亜理紗・・・帝丹高校2年生・・・らしいわ。」

「蘭さん、園子さん、あの人を知つてますかーー？」

「
「・・・
知らない。
」
」

「驚いてるみたいだけど……」の2人。
帝丹高校の生徒なのよ。

しかも……工藤新一の知り合い。」

「えー？」

「とくにこの黒髪の蘭お姉さんは新一お兄さんの恋人なんだから!」

「なんで恋人だと偽っていたか知りませんけど……
貴方がやっていることは犯罪です!」

「俺たち少年探偵団に嘘ついてなんて
げん！」どうだんだ！」

「……元太くん、それを言つなり『『ん!』どうだん』です。」

「あれ? そうだけ……」

「ちなみに、工藤君はもう部活やってないわよ。」

ねえ？蘭さん・・・

「え？

う、うん・・・新一は、サッカーは探偵をやるために体力づくり・
・

って言つて2年のときにはもうやめたの。」「

「彼女は工藤君と幼馴染・・

貴方が偽恋人だと言つことはもうわかつてゐるよ。」「

クッと口惜しそうに唇をかみ締める亞理紗。

「ね、ねえ・・・「ナン君。
話が見えないんだけど・・・どうこう」と、

「ああ・・・あの人、新一兄ちゃんの恋人だつて偽つてたんだ。
新一兄ちゃんこの旅館で起きた殺人事件を解決したことを
蘭姉ちゃん、知つてるよね？」

「うん。」「

「そのことのお礼をあの人があんだけつて
しかも宿泊代もタダにしてもらつていたみたいなんだ。」「

「なにそれー、許せない！」

声を出したのは園子だった。

「新一君の恋人は蘭なのよー！」

「だ、だから・・・私と新一は何も・・・」

「何言つてんのよ、あんた新一君に生口白されたじゃないー！」

ズキンッ

哀の心に何かが突き刺さる。

「新一君は蘭以外興味ないこと・・・
帝丹高校教員合わせて賭けてもいいわよー！」

「園子ー！」

「・・・いい？

貴方のやつていたことは犯罪なのよ。
謝つて許される問題じやないわ。」

「やつだよー」

「やつだー」

「罪はやつだと償わなければなりませんー」

「・・・」

じまへ、亞理紗はその場で黙つていた。

S u n F l o w e r · p a r t 8 (後書き)

まさかの蘭、園子登場！

旅行だつたのかな？？

おいおい・・

「それより、何で蘭姉ちゃんたちがココにいるの?..」

「前、言つてたじゃない。

学力テストが終わつたら園子と温泉に行つてくれる。つて。

(せうこや、そんなこと言つてたな・・)

「へえ。」

「コナン君たちほつ帰るの?..」

「今日だよ。」

「じゃあ、私たちと一緒にだね。
ねえ、園子。」

「え？ あ、うん・・・」

「どうかした？」

「運転手に迎えよこしてたんだけど・・・
急にいけなくなちゃつたらしいのよ。」

「ええ？」

「じゃあ、バスで帰る？」

「いいい、結構山奥だからバスなんてそうそう通らないよ?
さつき、元太たちと山を歩いてバス停見たけど・・・
あと5時間はバス来ないし・・・」

「つそ、マジで？」

「信じらんない。」と園子はもうす。

「博士の車に乗ればいいんじゃない？」

「もうしつりよー。」

「おいおい、人数オーバーじゃよ。」

「大丈夫！」

歩美はにっこりと笑つた。

「大丈夫って……これかよ。」

運転席には博士。

助手席には哀と歩美。

そして左から蘭、園子、元太……

コナンと光彦は蘭と園子のひざの上にいた。

「うん。

だって、コナン君と光彦君は軽いからのっても平氣でしょ？
元太君がおひざのつたら骨が折れちゃうもん。」

「・・・」

「しかし、こんなとこりを警察に見られたら
つかまってしまうぞ・・・」

「大丈夫よ。

例の通り魔でこっち方面に警察はあまり居ないから。」

哀は静かに言い放つ。

「あ、哀ちゃん・・・何か怒ってる？」

「別に。」

「おい、灰原。

気分が悪いんだつたら窓開けたほうが・・・」

「向でもなこひしていいのでは？」

「あ、そつか・・・？」

「えひせん、こわい・・・。」

「わあ、海だあ……」

「綺麗ですね。」

「青だぜ、青……。」

窓こへぱつぱつと覗き込んだ。

「博士、海に行きたい、海……。」

「海つてな……今何円だと思つてんだよ。
風邪引くや？」

「だつてー。」

「あら、ここんじやないの？」

眺めるへりい。別に泳ぐわナジやないんだから。」

袴の面葉に田を輝かせる3人。

海の寄ることになつた。

さてさて・・・

次回も宜しくお願いします！（結局これ・・・

「わあ、さむーー！」

「でも、気持ちいいですねえ。」

「疲れなんか吹き飛んじまつぜーー！」

「・・・元太君の疲れってなんですか・・・？」

「逆に」ひがが疲れちぢつてゐるみね。」

「ひ、ひるせーー！」

「子供は元氣でいいねーー？」

「あら、貴方だって今や子供なのよ？」

「んなこと聞いたらオメーだってそうだら。」

「そうね・・・でも私はそうこうの遠慮しつづから。」

しぃりと聞このける。

「そういや・・・あの新疆亞理紗つてやつ・・・
結局どうしたんだろ?」

「ああ?」

蘭さんは警察沙汰にはしないほうが良いって
言つもんだから何もしてないけど。」

「だよな・・・」

「宿泊代タダつていうのも帳消し。
報酬も返したらしいから一先ず一件落着。よね?」

「だと・・・思つ。」

「何よ、ハッキリしないわね。」

「いや・・・

なんかいやな予感がすんだよな・・・」

「・・・貴方の勘つて意外と当たるから嫌なのよね。」

「嫌つてなんだよ・・・

当たらないより、当たるほうがいいだろ。」

「 そ、うだ、け、ど・・・
そ、ん、な、不、吉、な、勘、なら、当、た、ら、ない、ほ、う、が、い、い、に、決、ま、つ、て、る、で、し、ょ、? 」

「 ま、と、に、か、く、俺、あ、い、つ、ら、心、配、だ、か、ら、つ、て、る。
お、前、は、・・・、蘭、た、ち、の、と、こ、に、居、て、く、れ。 」

ズキッ

「 ・・・、な、に、よ、人、の、氣、も、知、ら、ない、で、・・・ 」

「何をするんですかーー？」

「キャラーー！」

「歩美を離せー。」

「おー、じゃしたー?・・・」

歩美を抱きかかえていたのはあの、新垣亞理紗。

「おまづ様のよつなとじる。」

亞理紗は、今にも歩美を落とすつもりで。

「あんた達があんな」としなけりや・・・」

「大体はあんたの所為だろー?..」

「うるさいー。」

「歩美ー。」

「歩美ちゃんー！」

スローモーションのよひに歩美は突き飛ばされる。

コナンはとっさに歩美の腕を強く引っ張った。

その反動で今度はコナン自らが犠牲となつた。

ドサッ

「大丈夫ですかー!?歩美ちゃんーー！」

「歩美は大丈夫・・・でも、コナンくんが・・・！」

ザバーンッ

『ナホノハニ』

れて・・・

海に落ちてしまつた口anax。

風邪引いてしまつますね・・・。

そういう問題じゃない気が・・・

「どうしたのー?」

歩美の声を聞いた4人が駆けつけてくる。

「『』の姉さんが……」

「歩美ちゃんを突き落とすとして……」

「やしたら、『』が……『』が……」

「え?」

「『』くんが、歩美の変わりに落ちちゃった……」

哀はただ、驚くばかりだつた。

「・・・園子、その亞理紗さんって人・・・
捕まえておいて。」

「うん。」

蘭は「いかない？」

蘭はコートを脱ぎ捨てる。

「 まわか 」

「大丈夫、安心して。
コナン君は絶対助けるからっ」

「蘭！蘭！」

蘭は高い崖から飛び降りた。

「蘭の姉ちえーーー。」

「とにかく、トトロつるさじゅーーー。」

「・・・新垣亜理紗さん。

貴方、場合によつては殺人罪よ。」

「うう・・・うう」

「・・・何泣いてるのよ。

貴方が泣く場合じやないでしょ？」

「あ、哀ちゃん・・・」

「」これで江戸川君はおろか、蘭さんまで死んでしまつたらどうするのよ。

貴方、責任取れるの？」

「」ぬ・・・」ぬんなさい・・・」

「謝つてすむ問題じやないのよ。

良くても殺人未遂よ、貴方。

・・・博士、今から警察を呼んでちょうだい。」

「え? し、しかし・・・」

「彼女に情けは無用よ。」

「あ、哀ちゃん少し、言こあれ。」

「言いすき？」

「これで2人が死んだら言い過ぎも何もないでしょ？」

今の哀に勝てるものなど誰一人居ない。

「あ、蘭お姉さんだ！？」

「うあん！？」

「園子・・・心配かけてゴメンね。」

ずぶぬれの蘭に園子はコートを被せる。

「コナンくんは・・・？」

「大丈夫だと・・・思うんだけど。」

「・・・大丈夫なんかじゃないわよ。」

「え？」

「かなり水を飲んでるみたい。」

息もしてないし・・・」のままじゅ、やがてわよ。

「えー?」

蘭はすぐさまコナンを寝かべらせた。

「コナン君ー? コナン君ー?」

「・・・人工呼吸。これしかないわよ。」

「うん?」

「コナン君・・・

「博士、向やつてゐるのよー。救急車呼んでー。」

「コナン・・・」

「コナン君・・・」

（大丈夫だよね、コナン君・・・！）

歩美はただ、お守りを握り締めることしか出来なかつた。

れてさて・・・

コナンの意識はいかに・・・!?

『応急処置をしたのが不幸中の幸いでしょ。ですが・・・この気温で海に入ったことと水を大量に飲んだことが最悪の事態でしたね。』

れきほどの医師の言葉が頭から離れない。

「あーいちゃん。

昨日からなんにも食べてないでしょ？
いろいろ買つてきたけど・・何食べる？」

「・・・」

「んつとねえ、サンドウイッチにおにぎり・・・
パン・・・どれがいい？」

「いりない・・・」

「でも、何か食べないと。」

蘭の言葉が次々に降りかかる。

「江戸川君がこんな状況で
のんきに食べられないわ。」

「そんなこと言つても・・・

哀ちゃんが倒れちゃつたら元子もないでしょ？」

「貴方になにがわかるのよ！-！

強い貴方に・・・私の気持ちなんてわからない！

わかつた風な口を利かないで！！

ダッ

「あ、哀ちゃん！」

「江戸川君・・・なんで、なんで貴方は・・・」

哀の走った先はコナンの病室。

「エリス、田を覚おもなこのへ。」

何時になく、哀は弱弱しくコナンに話しかけていた。

普段じや絶対にありえない

哀ちゃんの弱さ・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0689y/>

冬の向日葵

2011年11月24日11時00分発行